私を照らす貴方を花束に

花き装飾コース　佐藤　雪乃
（指導教員：林　誠）

1.　はじめに

私は、生花店で仕事を体験した際、花でお客様の希望を形にし、笑顔を生み出すことのできる仕事だと感じ、私も花でお客様の思いを形にして笑顔や感謝をされるフローリストになりたいと思うようになった。就職後にお客様の思いを形にできるよう、制作技術やデザインの幅を広げるために様々な花束を制作しようと決めた。

花束を制作するにあたり、約 10 年間推し活を続けてきた自身の経験に着目した。「本人不在の誕生日会」や「入所日、結成日のお祝い」などではグッズやケーキを飾って祝うことが多いが、近年では、それらとともに推しをイメージした花束を飾り、SNS に投稿する事例が増えていると感じている。さらに、グッズやケーキを用いず、推しをイメージした花束のみを撮影、投稿するケースも増加している。

これらのことから、近年の推し活ブームにおいて花の需要が高まっている点に注目した。今後推しを表現した花束の注文がさらに多くなると予想している。

そこで、様々な推し活を経験している私が、大好きな推し達や映像を花束で表現し「わたしを照らす貴方を花束に」と題して作品集としてまとめた。

２．作品紹介

（1）「ニュー・マイ・ノーマル」

（2）「네가 소중히 여기는 사람」

（３）「いっそ、嫌いになれたら。」

３．卒業制作を終えて

今回の卒業制作では、10 個の花束制作に取り組み、さまざまな色合いやデザインの花束を制作することができた。これにより、自身のデザインの引き出しを増やすとともに、バランスよく花束を制作する技術や、調和のとれた色彩感覚を身につけることができた。

また、イメージを花で表現することの難しさを改めて実感した。見た目として、バランスの良い花束を制作できたとしても、表現したい人物や作品のイメージに合致していなければ、推しを表す作品として完成しているとは言えない。そのため、感覚的に制作するのではなく「どのようなイメージで制作するのか」を言葉として明確にし、具体的なイメージを持ったうえで制作することの重要性を学んだ。

制作を進める中で、花一つひとつを綺麗に見せることの難しさも課題として感じた。花材を入れすぎることで、かえって花の魅力を損なってしまう場面が多くあったため、花材一輪一輪に意味を持たせ、「なぜこの花材を低く入れたのか」「なぜこの高さ、本数、位置なのか」を説明できるよう意識しながら制作することの重要性を実感した。

さらに、検定やこれまでの撮影経験によって身に付いた固定観念を壊し、作品に最も適した方法を柔軟に選択することの重要さを痛感した。

卒業制作で得た経験や学び活かし、今後も多くの知識、技術の向上に努め、花を通して多くの人の想いを形にできるフローリストとして成長していきたい。